

誹諧

貞徳永代記

繪師傳
卷之一

特別
5
6056
2





松永貞德永代繪師傳記卷之一

目錄之次序



松永貞德系圖德仍之中緒正統之事

誹謗貞隆監觴之事

九條彈定殿下京極殿連壽御舍之事

音羽山清水寺金閣殿苑社舍之事

連壽中武新式出要秘決之事

小野松島聖廟連款由來之事

洛东妙法寺排踏之舎此事

洛东栴檀葦之丸屋舎之事

御傘編集并排式目十首之事

云外軒西武万葉排踏之事

發句排踏才的傳之事

諸公之排士貞徳才子と成事

天竺^{テウシヤ}曾時^{ソウジ}式^{シキ}祝^{イハヒ}排^ハ踏^{フミ}道^{ミチ}一^{イツ}道^{ダウ}元祖^{ゲンソ}道遊^{ダウユ}軒^{ケン}吟^{イン}花^ハ堂^{ドウ}
 松^{マツ}永^{エイ}貞^{テイ}徳^{トク}明^{メイ}心^{シン}居士^{クシ}柞^{ソク}苦^ク作^{サク}花^ハ咲^{サイ}翁^ウ之^ノ慈^ジ父^フ公^{コウ}
 永^{エイ}種^{シュウ}翁^ウ八^{ハチ}栴^{セン}列^{リツ}子^シ椀^{ワン}之^ノ城^{シロ}主^{ヌシ}松^{マツ}水^{スイ}和^ワ基^キ之^ノ嫡^{チツ}孫^{ソン}子^シ
 冷^{レイ}泉^{セン}妙^{ミョウ}書^{ショ}院^{イン}の妹^{イモ}舞^{マヒ}之^ノ秋^{アキ}露^ロ之^ノ月^{ツキ}之^ノ鳴^{ナリ}世^セ彩^{サイ}在^{アイ}泉^{セン}
 宗^{ソウ}粮^{リョウ}之^ノ連^{レン}方^{ホウ}此^{コノ}弟^{ケイ}之^ノ子^シ以^{ヨリ}傳^{デン}之^ノ紹^{ショウ}巴^ハと相^{アヒ}才^{サイ}子^シ
 才^{サイ}子^シ永^{エイ}種^{シュウ}貞^{テイ}徳^{トク}之^ノ生^{ナマ}元^{ゲン}龜^キ二^ニ子^シ未^ミ此^{コノ}年^{ネン}是^シ冷^{レイ}泉^{セン}室^{シツ}家^カ
 卿^{ケイ}の苗^{ネノ}裔^{エイ}也^ヤ天^{テン}質^{シツ}類^{レイ}悖^{ハイ}之^ノ季^キ世^セの優^{ユウ}曇^{トウ}死^シ絶^{ツツ}
 倫^{リン}の非^ヒ重^{ジュウ}麟^{リン}兜^{トウ}鳳^{フウ}雛^{スワ}也^ヤ十^{ジュウ}家^カ少^{ショウ}之^ノ六^{ロク}經^{キョウ}之^ノ續^{ゾク}能^ネ書^{ショ}
 之^ノ連^{レン}方^{ホウ}此^{コノ}執^{シツ}筆^{ヒツ}也^ヤ十一^{ジュウイチ}家^カ少^{ショウ}之^ノ再^{サイ}也^ヤ志^シ
 足^{ソク}とや云^{クニ}半^{ハン}也^ヤ細^{ホソ}川^{カハ}云^{クニ}有^{アル}法^{ホフ}也^ヤと師^シ志^シ二^ニ條^{ジョウ}家^カ
 和^ワ方^{ホウ}の奥^{ウキ}伝^{デン}と傳^{デン}九^ク條^{ジョウ}以^{ヨリ}山^{サン}公^{コウ}此^{コノ}再^{サイ}流^{リウ}と汲^{キツ}弟^{ケイ}家^カ

古今源氏と傳へ三條林名院殿素然云中々院殿也足
 軒此奇林遊ハ詔巴法眼は随侍して連方此秘法と
 傳へ此名師の藝苑は獨歩し詠ふる名方秀逸
 多し載て貞徳集載恩記三之其撰と歎不此書
 汗牛充棟家り満中少を和奇寶珠女卷ハ古今
 卷小なりして作と歎林檎二十八卷ハ法華二十
 八品り準して作せり貞徳翁一生奇字秘傳は良枝
 け書よ籠きり寛永年中莊年時分かれハ才子
 遠方より事歎されハ貞徳翁道の高量云云并り
 云々云々わやとせ給ハ 太上皇帝勅詔云々禁闕ハ
 石上云々秋いと云々かり記又首の勅詔と下云々

ぞり何事も秀逸函數の名方云々ぞり中々遠見の
 月と云御題の弄

松浦深くあつ月よりあはれ

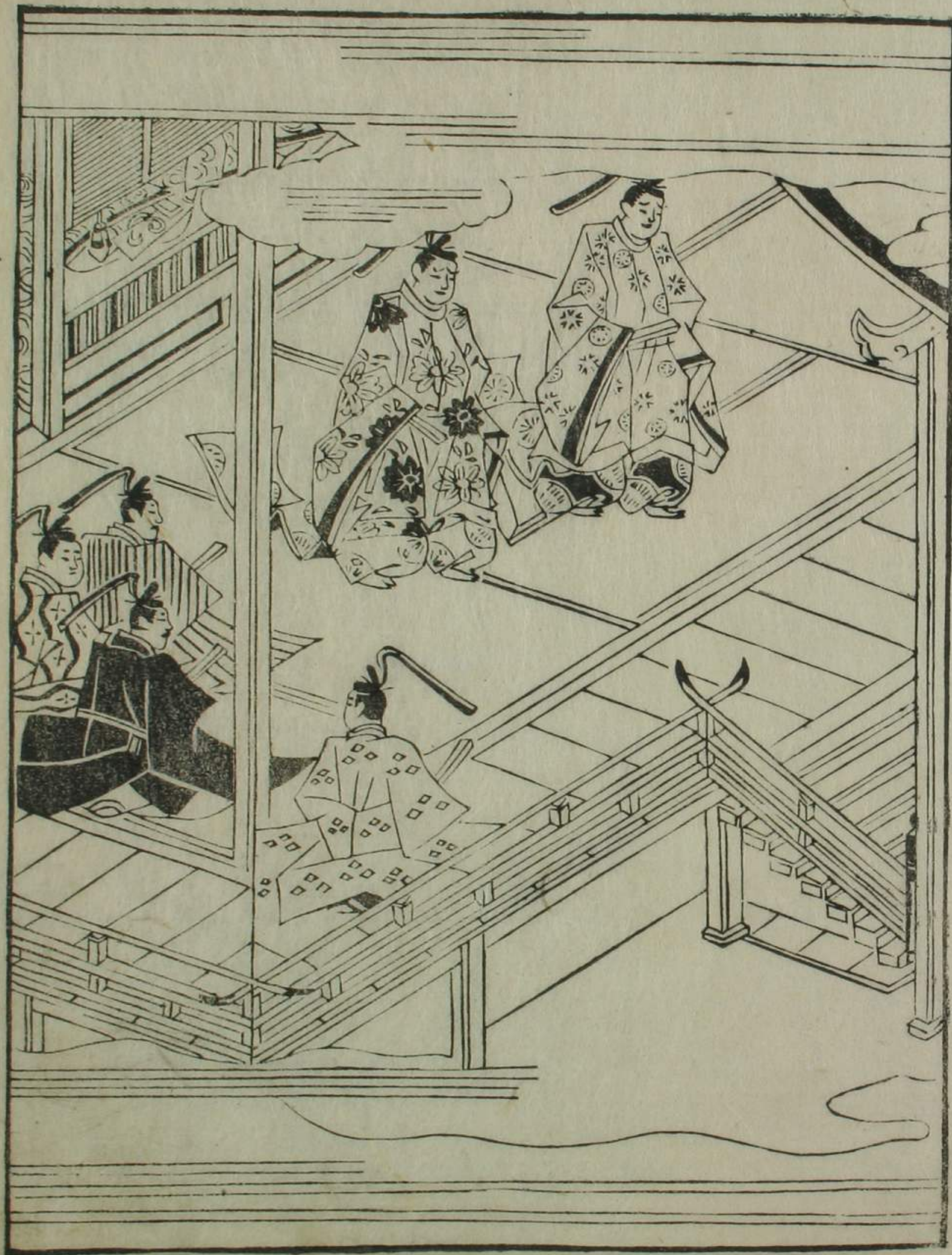
こそれとてまてりあつらう那

中々前二唱三嘆あり御感の御眉羨麗時の傳
 奏形を升菊亭あ大袖言敷よ勅命あり御料理
 御酒と云下を伝そ付又勅下りて貞徳ハ詔賜相方
 ともく續き伝はし雲をこりまらまされと云りされ
 ハかこまりて即具

らうくひひとて弄のあつと下されて
 ころけはあやふくも又首の中

やうみくもりせり。君王とてく。免まり。君（眞）をせ
給ひ。生前にた。幸ひ。秘りし。君。忠。へ。び。あ。そ。れ。奇。を。
地下系わく。ゆ。く。ま。て。は。と。う。こ。め。て。く。や。ん。
あ。と。那。一。其。と。玄。有。法。中。子。引。は。給。ひ。神。祇。官。を。回。
二位。教。へ。系。り。て。八。雲。の。神。祇。に。は。波。并。和。弄。二。神。の
御。正。神。爲。伊。傳。文。あり。て。ゆ。り。一。先。祖。二。位。兼。直。云
より。神。道。八。雲。の。秘。波。ゆ。傳。文。あり。て。と。時。定。家。神
自。筆。此。起。請。文。あり。と。て。取。出。一。洋。見。を。給。ふ。其
文。曰。右。右。秘。波。之。傳。文。三。世。の。原。由。我。子。と。云。と。と。
嫡。流。一。人。も。傳。へ。地。ん。地。言。致。る。く。は。若。け。首。と。
透。宵。せ。六。天。邪。地。祇。の。四。對。と。あ。る。一。一。や。半。終。不。世。

紙の字。一。近。傍。龍。山。公。自。筆。よ。わ。そ。と。自。徳。翁。小。下。さ。き
ぞ。り。是。より。孫。翁。此。身。徳。わ。ら。れ。く。世。人。を。敬。む。事
甚。一。和。方。此。才。子。少。六。加。教。盤。舟。廣。沢。長。好。一。華。堂。院。
三。之。翁。之。翁。乃。亦。流。と。汲。て。鳴。世。其。枝。葉。地。下。も。む。り
あ。き。り。儒。道。の。眞。澄。ハ。翁。の。今。子。松。永。昌。三。子。と。林。道
春。子。と。石。つ。き。北。肉。山。惺。窩。先。生。の。門。才。と。なり。四。書
六。經。百。子。之。文。苑。と。涉。獵。一。千。卷。之。詩。流。又。新。江。と。火
一。史。と。通。讀。一。切。經。と。よ。み。く。校。書。八。千。紙。之。書。と
あ。て。ん。と。と。ら。半。那。一。太。上。皇。帝。震。秘。を。て。
昌。三。子。の。一。切。經。の。校。書。八。千。紙。ゆ。写。さ。せ。給。ひ。其。博。覽
れ。天。文。と。愛。一。の。得。一。免。さ。き。宋。朝。類。苑。勅。令。一。部。



震動と羨り以裁して、家寶とせり。昌二の字を以て、
 聖廟之竹林春舟、木下順菴、澁川随有、安友省菴、宇
 津宮由的、皆その名に教子。昌之先生の代柯ありて、
 六經と傳へ博聞宏瞻の巨筆ありて、青於藍、昌之長
 子。春秋館、昌易子。孝子。懷德堂、永之子。よきて、實学
 徳行と兼の博學へ、林道春子へ、天下此儒宗と成て、
 三百年來の博學、江戸を以て勤仕し、その子春舟、中朝
 通濫とくをり、此子葉孫枝、鳳毛の義と継て、百世の
 嚴師とて、心事へ、一朝一夕の故あり、此排門一道
 此先祖ハ、中朝よありて、誰うけ箱と遠宵とるるこ
 此排の流の才子、此よ不定のあり、そのり、それハ、家

よハ累々として、緒乃よ達せし、箱此徳以、不可勝計、
 未く、此身ニ記き

正徳貞隆之濫觴

京極殿連舟御舍之事

寛文長三年八月十八日、豊長秀吉、享年六十三、依
 見ノ城ありて薨せし、此、同五年九月、濃羽園、原の
 戦よ、凶賊滅し、天下譽り、家康公よ歸伏し、此、事
 と唱へ、武徳と頌と、同、名、度、り、を、教、師、代、ハ、方、と
 世小、到、り、と、天、地、と、共、よ、長、久、成、一、と、也、五、代、一、魂、
 記、り、依、り、を、長、十、七、年、壬、子、年、太、上、皇、帝、御
 即位、君、臣、合、辨、の、仁、惠、の、由、り、の、聖、の、此、代、よ、も

勝色和方連齊れ道と重し給ふ十時慶長はく丸
 つくし湯がまると其を来くきとありと揺りなり海うせ
 てハ風の思りん事をも和しと云の丸月未けり
 九條禪閣系極殿よて連方れ由舎あり。御連座
 近湯殿下龍山きと云由舎なりと云れ新在事此宗家
 宗親法橋紹巴法眼細川幽可言旨法下山湯系
 門宗鑑法師。玄永永権同貞徳。そ外公親也
 由舎座ありと云り。わさくね樹木時とえふに
 殿と云く。山郭云と云の事。郭の穴垣り。咲
 まし。由八重山吹の一枚らり。孫ありと云い。わりき
 かり折く。湯泉あり。杜若濃ユキひと云れ。咲白ふ





禪園所現して宗鑑とるべき所の杜ありと一のや折之
 汝の夢の油筒の花生ふなりを入手と仰ぎをれん
 宗鑑うと仰り座成立き候が生れ付瘦法師を
 里々のに殊よ老園タテて足りともたともて池の
 ちととよりとるるとお屋しくお海一老引宗鑑
 池へとゆるかきしとゆふつとさるるに座しとて
 杜若と二三廿神々きしとえさる成近坊教は覺て
 宗鑑の夢と見れぬ御鬼はりることと云々候
 連高二月は梅と舞ある所作意の思こそ成とて
 幾のまふ宗鑑う候にかりをれはともかりぬく法
 脇下はとて

のやんとまれと夏の沢水とやあざれの
青月法下才三三法として其まゝ

詳く守山郭の飛言てとかなんれかまの

貞徳末庭小ひひ

あつと時月をまん丸と言句目と致し
まじり何まとも名近のうひありとつよく身とを
あひの玖山云おやせりるのあ連あれうら志多り
う後案少く辨辯を真ありとつよひありと
うこのま物こそも古今集の一冊をれい末代の
さらんふなるへ一荘年あれい貞徳其答小あ
まじり連あれおらく辨辯一道と真降せりや龍山

玖山より青月法下紹巴法眼号ふ作付を
貞徳よ辨辯一道の末近を別して殊克とあり
是より日かぬれといふさらんまねたりまじりと貞
徳私の家と云書よあり

清水寺苑の舎と事

貞徳連辨あ道北宗近と九條殿下玖山を
殊克が東山清水も金園殿あま地王権現法樂
れ連あれ舎勅らせり九條殿下と成就院へ
り傳りきき教時 禪院御發句

連舞の式

花より道より遠くはるかにあり

秋山

春より花よりいづれもあはれ

貞徳

たうとらふとそそぎの雛子鳴捨て

花より道より遠くはるかにあり

は清き白の連袢も道とおもて、宗近とひ見たり
御挨拶の御句におそれおろしはひさの祈と
くろりまふり、貞徳のゆかりの御連袢と好きて
言葉は花屋のやうに、花守の雛踏のたふさきて
ゆきまふりひくひ道さうふなり、この御作さあんと
ふくひの御歌、おとふさう、いと遠く其心は
まき花よりいづれもあはれ

花より道よりいづれもあはれ

貞徳

は腸のたうとやうなまはれ、ふとくともて、
く風流もいづれもあはれ、御挨拶のたうと
きく、わきり、御下の御歌、お家の御威光、ふと
せし、まき、雛もともあはれ、お清き、うん、ま
さ、まき、雛もともあはれ、御歌、いづれもあはれ、
と、まき、雛もともあはれ、御歌、いづれもあはれ、
御歌、ともあはれ、御歌、いづれもあはれ、

たうとらふとそそぎの雛子鳴捨て

言旨

中三のまき、けさく、幽玄とひさ、くともあはれ、
くま、わ、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
言旨、まき、く、く、く、く、く、く、く、く、

吟夢と出してきこひまらひ無きりとのに捨扱ぬ
愚意の垣釈くくろり多々き大辨如初心とまくりん
く免記之類く余情意味凡意のあふあふあつた
右御連宗の事極教の中其人教たる御しりり
平代に連宗の宗近一代より一度の地主権現れ法宗
不執りわりきり宗紙本式連宗れ意句

水うわり花いささくた清山くね 宗紙

是中法樂れ意句より清水の二字と入らきり
宗養の不執りともや念の事なりとて紹巴法眼の
不執りより信く貞徳し執りしれり清水金
閣殿とらへ地主権現の東北方より唐破風作りり乃

閣ありきり 九條殿下れ法成りきとびりり例
りり法成り閣殿南向りて東の扉より對れ花懸を
立中きり 後陽成院御震養大慈悲のそ縁く

清のれ修へ集れへとのりり

現世安穩性生極樂

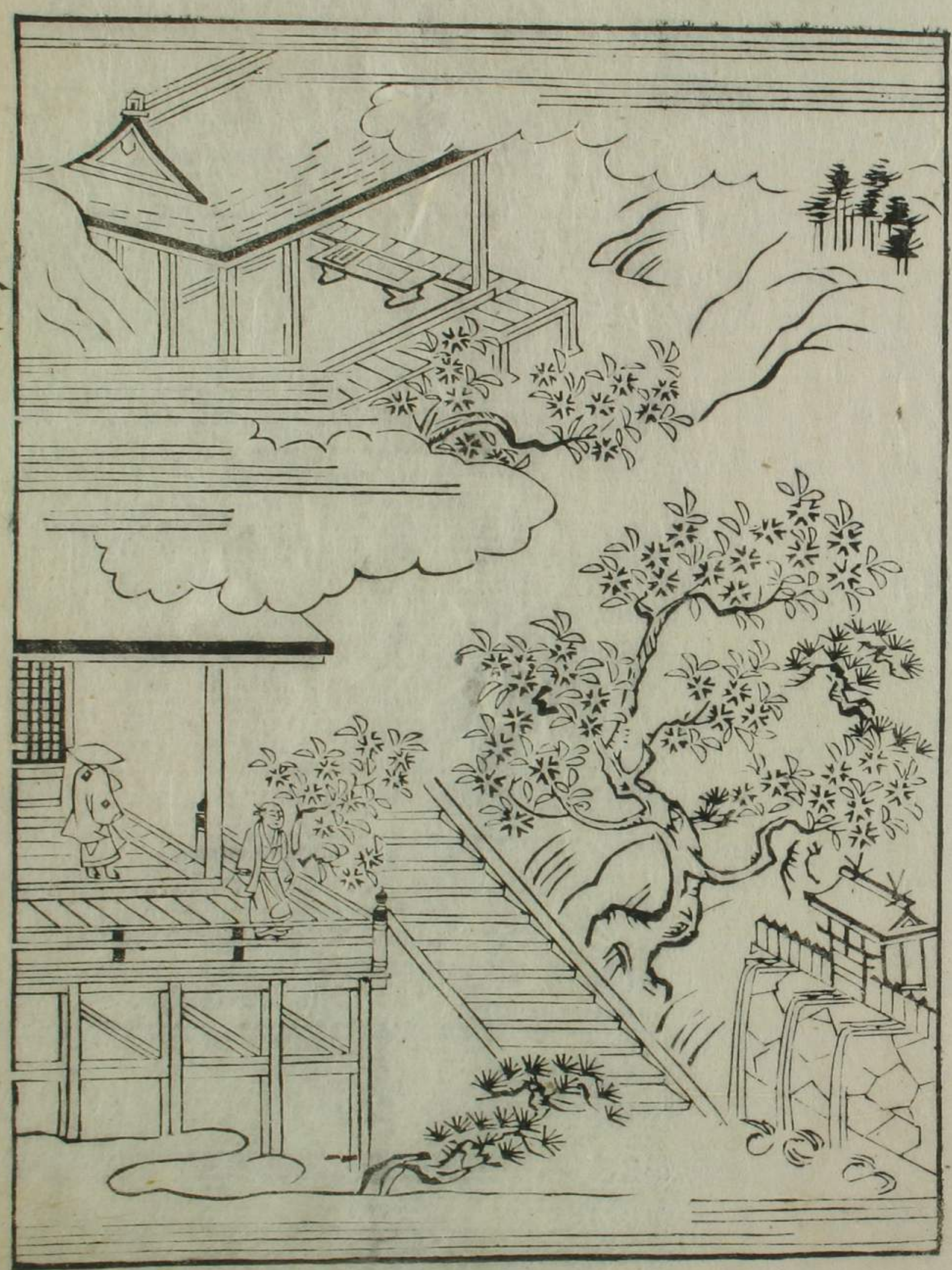
は法宗の去ら家々々雲閣清水寺親世者と常よ
信して百日集清りてをまひり時養也よ何り
縁し縁のりり是れわすれりとも也親者此等
縁といひ法震業といひをそ実をきりり凡た
人丸右の天祥執養へ清のれ寺僧永実信りり也
貞徳集し記しりり比金閣より南方と見履きり

大慈應護の彩態聖補陀洛山と詠めんと生約
 う嶽もよのわらうまうの里と。善羽の遊れ東落
 花う遊りくわやまふれ一於人の糸指疎生山分
 お一通款柳う袖う。常く急の花物くう。玉瀨の
 地主権現なれくわうううう。霊湯やう。諸行
 無常れ世の伴とてがうう。山寺も寛永れ初は
 と焼失せう。後らう。それる時の相方

寛永れ六の九月の十日れ日

情ありけ焼致己の時

と時彼全閣致も焼失たり。今ハそ飛計且石階
 志りく強きり。その後 台徳院様追付再建とて。



びうと配え法堂作り長はうしてまうさされ

妙満寺書の今と事

伴勢の山田荒木園守武におも官とて弄人なり。由縁あり相方れとありし故。彌精の千句揚吟あり。奥せり執一とて法世なるよめつじをそて遊ひたり。世の中の百それ作者。又と神書と作す。古実と強ききとあり山崎宗鑑能書れり。と書違ふとく。免をい列は信右せり。きしが。一生法本の家。此屋う返して後あらたり。寺れなり。母のて常よ。物々れとありとて。不立。店屋の。糖餅なりとて。一生とす。こゝろ一人。中比。おま。お勝。とて。鑑列。親。あ。る。琴。

川ののり。り。る。の。れ。順。の。び。方。れ。川。岸。よ。住。を。致。ぬ。と。所。は。一。巻。巻。と。て。今。小。寺。あり。予。お。ま。下。り。し。時。ふ。の。寺。小。一。宿。せ。り。と。宗。鑑。の。書。が。う。れ。一。寺。の。所。に。色。紙。と。見。ゆ。り。と。り。げ。人。連。立。の。所。歎。と。も。ゆ。れ。信。經。ら。り。き。れ。ん。と。つ。ら。り。も。ま。り。つ。ら。り。書。有。し。念。法。よ。は。好。い。と。り。の。り。の。あ。く。彌。精。前。白。附。と。せ。り。致。たり。大。抗。波。と。て。道。戯。き。る。前。白。附。一。体。風。の。う。つ。り。ゆ。り。り。の。時。の。そ。の。の。書。有。し。宗。鑑。し。自。徳。し。十。句。書。り。此。を。捨。て。り。め。て。彌。精。と。て。定。り。き。法。會。席。も。は。し。を。後。寛。永。六。年。十。一。月。に。あ。つ。つ。と。京。寺。所。妙。満。寺。と。て。彌。精。の。會。ら。り。免。を。と。り。美。連。を。の。會。れ。武。法。よ。毛。次。た。る。ん。

床より天竺人丸とけ花籠と云文基とく由之或法の
會席乞始之を時れ意方并面八角と書付付然

は綿らぬり痛りりれ庭の男 お水 貞徳

火折めされよ雲のあらもよ 山本 西武

天人や空を渡りてゝ魚ねらん 聖口 親重

瀟水清らぬの松の空り根 妙海 日如

いづくともさぬり定ぬ彌陀舟 末吉 道節

月せくも雲山農方角 平勝 日能

竿あり目と絲打くらぬ存れ空 鶴冠井 令徳

糊付礎夕那あらく 了圓 宗暉

以弁連の畧之執筆ハ活習居之旨之に依張山守



西武亭主少く執りて世に於て其外形は強りて書
と書寫し一付に西武の二條梅忠代町一と云て
綿高賣せしれ一に法を以て其書は接換せし世
と云へきなり。その時を以て世人丸の繪像を云々等
益の筆に身徳西武へ傳法の中よび人丸并書首
法中自筆は八雲の秘法一紙も定身徳自筆は
批点評免の一札長良集載也此排指式目十その
狂歌歌々集はのり一も不排書不致もこのれり。
び人身徳の跡同此排傳嫡統の書才に是何なる
かこん排指く先妙満ち余と西武直主少く其
行せし排一由緒也一

連哥本式新式と次弟今案等々事

連方新式を以て其の式をよりて新式といひ
是頃の牡丹花背拍代今案よりて觀覽し其達して
定らるる也。依て其の式を以て式と云ふ。十句一
く賤物よりてさるるひ入組おとひ川りて其
新式はわらき若くは建治の式といふ。
人王九代後宇多院の御宇也。新式といふ。應安代
式といふ。人王百代の帝後圓融院の御宇也。建治乃
式と云ふ。人王百代の帝後圓融院の御宇也。建治乃
式と云ふ。人王百代の帝後圓融院の御宇也。建治乃
の眞澄也。二條梅忠三代の関白後普光公殿下良
基公之。叔弟善河順覺周河。信照良河等。其時の

好士之ニ條教下立水外水と云連款出衆其書以今
 素仕給ひく重く秘して世より出されと或時 少野
 天神老人と化して教下へ出あられり取給ひく
 少野の梵灯菴主と云好士に授け多しと云教下
 老人此跡と付給へし少野の神文よ入世給ふはり
 少野連哥と新式と用て立水れてよと云梵灯より
 受傳へりりそれより少野の建治の年式よりてよの
 秘波りぬりり連方此神も天神此也日本
 式れきと給ふらり連方此神とせり急安此新
 式の勾結と天神此納文わりてしき建治の式
 よい出ありんげ度出現仕給ふ事とて是より後



天神と連奇の神と崇奉しり存立水 二條殿下
の山自筆あれん梵灯の写させて正筆紙ハ御神殿に
納めさせあふとそ 依之梵灯とお野連奇此出葉元祖
とつりび人丹波朝自山の人もく連奇此妙と得し
終一也也

人と送りて帰る野の末と云前句よ

丹波朝自山の煙れきあみ強うんと云付句と
ま此名譽の妙句と云 詠人其心と少冊と煙の宮
とて末社を教ふげ神の化現と 詠人あつり
又ハ朝自山の生れなりきん少冊の地と朝自寺此
詠者の化乃あふんと云今げ人と信作より表自

連奇ハ少冊初會の時執筆語く懐紙に枚の面斗に書
きり半神祕れ右例と云く 今正月三日必うく白連奇
八枚と書りてとそ 新式連奇ハ立水外水此書也
天神の双眼と云半深童子廻る事とそ 龍鬚毛毛以
うろく祓ぐ天満神と備小信作長しび立水外水此秘書に
情なり福ハある半新 今の新式しけ古の中より出り
立水外水此讀書人志れぬ習ふと極此神祕をハ懐紙

新在表新式連奇此事

二條殿下と此の好士とわの先は列石山あり此古文句

月冬山風そ海ぬよ少冊の地 持政殿下

さ、坡さむと表とそ更され 月何

松一本わし照落家小つれく 侍云

乞より侍云宗近とうを給りて新志家此連方侍来
お傍へとうや右の教下此秘書は侍新在家に侍く
連方此秘授とされり此の自徳宗親紹巴より侍受
てし世守る排指の如系し連方之水此秘決小毛頭
うつら福く悉くを執心無量此父子あま重く授け侍と
書せし写ししつれり侍侍秘此連方此書
されく書写しし守るにけ侍侍之と宗近とむさ
や板行よと侍事此方三此此其加又侍侍事
其法より大尉宗親を給り侍侍侍此秘授子
まじく平板行よ書出り侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍

元禄一給りされし今此郷士此長者とけし中緒
とし不奇家子ぐり侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍
此方此神神と引出り侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍
されく信心と内陳へおさめん侍侍侍侍侍侍侍
紀之此方此道あり侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍

梅園若此九月月々會此事

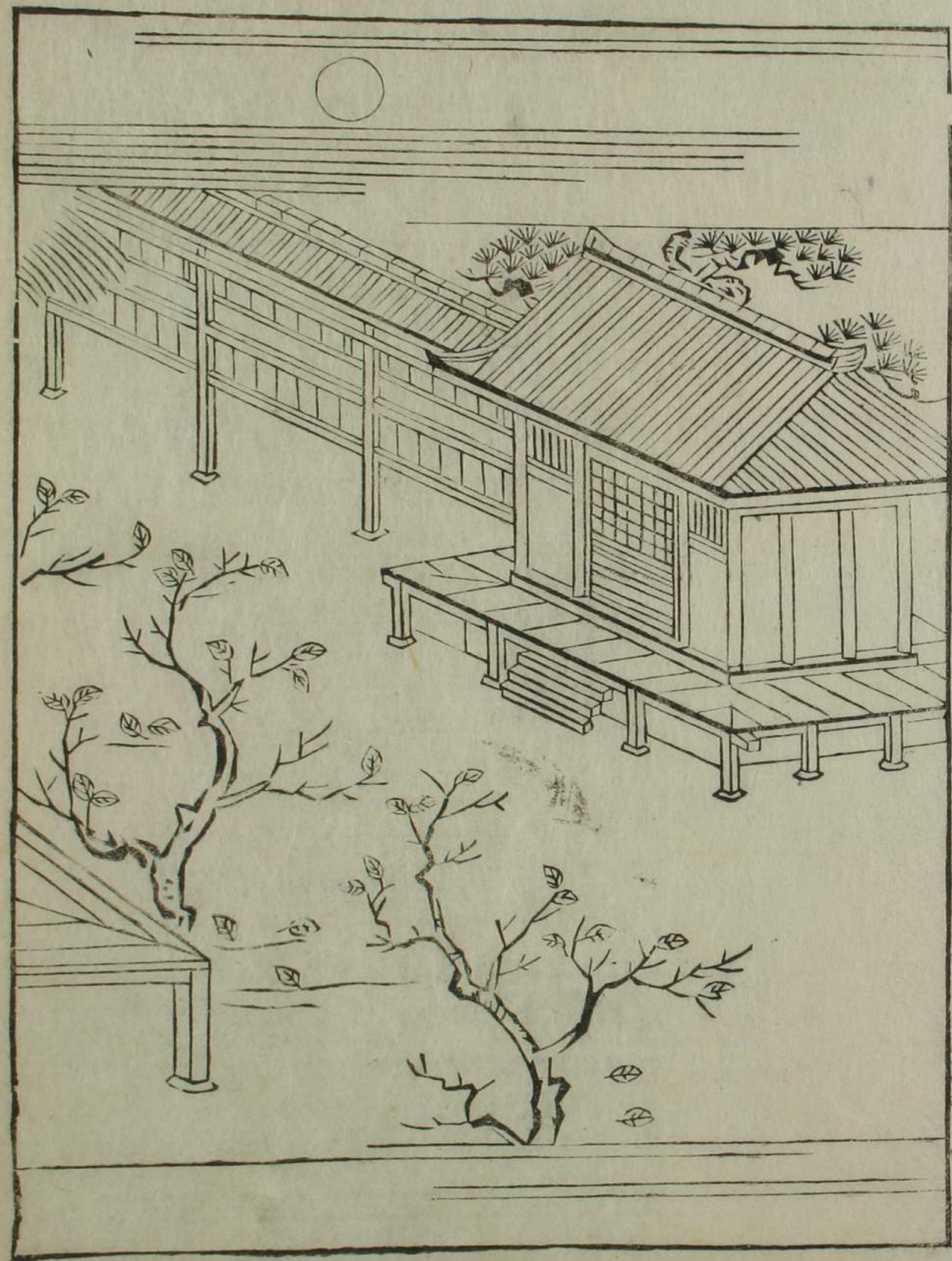
義徳元年の八月梅苑わし此九月少て一會真行
とり是ハ山中西武と安原正章と主人と批点ゆる
一給り此容宴此今へ致す

天長く千人^{千ヒト}やびる也秋の月 真徳

物々々世の荒れ花の夕霧 正章

旭々々世の荒れ花の夕霧 西武

其席よりつゝありし連宗鶴冠并良徳の園宗畔六
 条の立場金相山村孝吟末吉道節池田正式仲徳
 貞義小原正在徳平正伯山田佳種等々び柳園ハ
 妙法院御門跡の山境内へ松永貞徳日吉道ととせ
 るふ所法老様御りせられとび地と貞徳并領して
 其れ丸屋と作し廊下ととせし法苑苑と云小堂と
 建く法華千社ととせし生和所此舎排階万句を
 こゝとせし都鄙の好士ありまきりしと蓮華王院此
 三千佛大佛宝殿豊凶山智積院東へ今慈野門田



の猶葉花盛りて村色も此より事秋の
 丸屋の秋形風夕なれば身ぞ感懐う
 境代へ東南よりわたりて天子御を
 泉涌寺の法陵山蓬う洞北麻の
 て物うすし葉田のうらふらむと
 尾花う袖境地といひ折うらむ
 よひのそくくまへ身は行きの
 かりりやも連前し一入も
 今席りしゆりし人てびう
 やまーをーそちひつをぬき

貞徳編集式目之哥の事

御傘一部十冊は書八連
 の控以定くきざり連能
 得中此書へび書とん
 排指と心人を根本と
 控りれん雅うび書
 まへへび介江川油く
 式目十首の和歌

排指を式目そむさ
 和漢よの季意速懐
 排指ハ右のみ也
 和漢よの季意速懐
 排指ハ右のみ也

水邊也又山類の神月の連方はくく志うあつたなり
名所必名神祇人志志を常述懐く旧あつてあせせぬ
鬼女虎狼の十句物面少もとれと一座一句と

新式よ一層百の二句と一と二句此物と一三句と一
三句去物八句のまじり物あつて残るく又つと一
新式よりとあつてと揚物といふと一七句と一
連方あつてお物の名もあつて何れもあつて一層一句と

三十一

又あ武へ命して能辨のころ集を何あさくせり又冊を
あ武れ名代されとも皆身徳病れ今業へ右十首の
お録自筆小書へあ武へつとまきとあ武へ又追かよ

十そのお録して門外不出とあ武への中あ武へ
とり次記之

門外不出 十首狂歌 外新西武

能辨よ揚らん物を人志と悲れ故時倍れ今座り
とつと席あせぬ先銘札又言解とそそ大個
能辨も能辨信女と云あつとあつて此句語人張るは
とつと先つ座小一巻と書付てくハ能とくせよ
能辨の金言妙句と云あつとあつて老若も能出合遠近
とつと能辨とてあつてとあつて大人此ととつと能辨
今合を能の句なりと能ととてあつて一人其人此と
句能の句とあつてとあつてとあつて能の能合とせよ

白鳩のまたとひ不審のけりねとて尚ほあはれとて
まゝの心とてしるしとてまゝ念入とて丸れとて一は即ち

萬葉之誹諧

無外軒

西武

陰覽日本國樂榜之枝

頻十所泣香名子規我豔

月金是照母無賀伊人且

未申長々永四云秋

久留具類常目來繩手也色奈覽

二騎爾何誰乃上洛

行啓之供奉丹見物有且去來

一津々々和別四舍朝觀

ウ

御會仁母同師事成通里題

催馬樂諷夫撥布佐八等

談合我明日駕入能有十而已

須伎遠不珠吉乎尋寄戀

歛乃釵能先布樣成空之月

荊田野跡野猶母世苦周禮

可之麻思久又々鳩舍吹奴覽

細工保采尤比射連播鹿笛

後能世遠阿关年迄母為知伎

若男遠望乃日布入

見若沙何二多十衣天加故都覽

耶不礼簾能内外耻扶

伊勢嶋舍山田能花入今尤有

春呼世爾將為枚之目立有

二

削來出來者見事二節乃箸

軒遠比布留類之貴尤

稀也十日者御堂能關白二

六條殿舍搦家門跡

何事呼清原氏能物語

落馬小而母異言樣々

五段田十世仁申來鴨能人

葵遠紋丹布濃締

繩從母將思登者衣賦

月見之供仁手柄爲里計武

鉞持之其持樣遠身二入且

面良不天嬉思時不有梅

金有金大服奇母茶事有

東者春耳出洲仁志看

少

山伏能腰仁付留者室良之具

先永刀指者脇尤之

祭礼乃時者火遠故十撰類礼

十香久女者臂可將爲

人能物於我受借株呼縁西有

荷惠類問實者早稻之稻也

月野比者邊土賑布最中從天

新酒酌尤機嫌吉舍代之

頓又相坂越天関送里

繼者碁房之上能分別

淙爾波不肩十而已之業遠云

炙二增天伊波原可笑散

花紅葉其節將二八月

拾六羅漢夫々能容

三門止日者何人用舍疑

延曆寺庭物事賀有

丸具師可近江有所來長良山

風乃和久者櫻咲比

霞柄棚無小舟漕出之

節分過連波春者其末々

勢刃奇鬼我登土沙汰有天

月二涼敷炭能肩衣

礼儀遠波盡佛能御前鴨

昔咄遠聞二清盛

下手上手有者上留離舞有之

歌以之事申曰爾不及

何尤母鷄遠限之暇乞

誓遠立天後之約束

ウ

法然之一枚起請難身

新黒谷申東山奈里

白川毛所流水者水也二

檜垣乃姬旧者何人

真風能便能有母戀之道

歌爾立名申高砂能松

住吉能神仁祈遠掛蒼天

唐渡里爲留首途說有

合讀母乱有者魯文字之數

易遠習布十夕月能影

秋之哀所曰梓能弓之絃

置之扇之草紙何爲

業平能昔者花之外母無

戀遠長閑爾奈良之京衆

名

油煙毛天書初從母口說有

都余久豆四有此壁下地

蚤啞声聞八無道

蚰者所入阿六穴賢

芝原母官能万和里者色付天

汗申宇久所見月之夜相撲

加飛瀆之車遣乃喧嘩有

誹二來祭唐之文

細從母大小遠唯年伎乱互

難苦成迹之信見拵

主持者一入物尔念遠入

何丹堺母不有夜晝

難波津舍兵庫綱引被有合

內裡能事者叔毛聞言

ウ

華一追袂爾受可類子共々

廿日團粉常云者正月

消度口留氷砂糖申曲器二

倍木丹所見和侘多進上

此所長成良能礼請天

窓打開伎直須腫物

疱瘡者他末里舍不致湯遠懸豆

天下太平天下太平

山本西武老人自蚤歲學予祖父逍遙軒
貞德翁之門出類拔萃以誹諧鳴於世者
久陰壁之窓灯雨之牀孜孜不倦勉々無
懈因是受萬葉集口傳而涵泳其源遂採
萬葉文字作為百句誹諧授之好事之者
焉一日示予欲索一語以證其事予與老
人相知日久不獲峻拒聊拚蕪詞以贅其
後云

于時延寶第八次庚申良月穀且

懷德堂人思齊永三書之

右方葉此辨精を志す所なりその自他より然んて
 せし又あるぬ人の素似も好く唐又は法縁の在りたり
 せ難西武の難をれんそらうふあふあもを志すある
 人を志すもぬ人を志すぬ所是なり日本を教の
 孫物にげ辨精を西所真徳をより辨氏物終る系
 のよりみらせたりし事一なりま百のとりてし内
 授せしき一時代物なりし系山教の系も湯道を
 と見るなりあく古風とのあされしき徳也此辨士
 此なりしきあもあんと託之あふよを志す此を三
 わくごとく重なるなりしきよ

松月庵遊稿

貞徳元日三物付之事

慶安^{元年}辛卯年正月廿日右大臣家光尊公御地界
同年八月家細尊公任征夷大將軍玉^三御年十二歳
明年^{壬辰}九月改元アリテ兼徳元年之計年々
三物付

元日

御成人此君小多^三わ名千代此表
振^三の竹^三あ^三を^三り^三て^三敷^三う^三 鳥 正章
秋^三入^三海^三苗^三代^三小^三田^三此^三土^三肥^三多^三 西武

貞徳

明年 癸巳年

元日

柘老弟以好書とよまき冬、麒麟山 貞徳

鳳凰山、鷗且此 弾 三章

おろろり、数月、此金、わく、嘯、吹、て 西武

同十一月十八日、貞徳逝去。享年八十三。明心居士と云。
多羽実相、古より華教、法華宗ナレハ也。内弟、京大坂
場、江戸、諸、由、に、数、多、を、な、れ、ど、方、く、也、と、い、ひ、く、の
追、善、會、に、向、れ、終、り、和、壽、記、に、い、ひ、く、也、所、以、令、徳、
貞、云、云、の、吟、梅、盛、み、武、立、甫、あ、り、此、追、善、京、中、に、
門、中、不、致、中、家、ハ、貞、徳、弟、の、長、子、昌、三、の、子、昌、永、三、
等、儒、家、に、追、善、儒、門、に、中、子、歷、山、に、勅、之、和、方、は、中、子、
少、冬、加、友、終、弟、廣、沢、長、好、一、華、堂、以、悦、爲、和、方、の、公、録、

して、勅、之、連、誦、西、道、地、下、之、陣、範、を、ね、ん、厚、悲、れ、報、
謝、遂、日、追、善、の、會、忘、り、せ、り、を、り、を、り、を、り、を、り、を、り、
を、り、を、り、を、り、を、り、を、り、を、り、を、り、を、り、を、り、
と、繼、て、お、分、追、善、と、勅、之、を、せ、り、

八千草の種や柘那れ君仰一 西武

の、家、年、又、十、日、附、ら、く、會、每、以、よ

残雪の名や形見の法の苑 西武

鹿北衣洗ふ切 徳地 念徳

三途川の煙をののの、此、あ、め、と、て 宗畔

才三、中、く、お、ゆ、え、し、や、書、守、持、る、げ、元、日、ハ、三、伴、せ、れ、ん、

門、中、の、あ、り、一、三、物、の、沙、汰、那、り、を、り、只、終、り、斗、之、

正章も鳥者此家とまゝく。容白とまゝきり

元日

志うりても天志敷地ある誠美か 西武

継留くくあそ名未始花の表 貞室

西武と法辨して名未始花西武と云正章と入
道して貞室と云あ家相たうひよ門外つれく威
候とみぐもりげ良たけしと物続も大文字全重頼と
安原貞室との数年仲ようく貞室が継留てれ致
白と云うて重頼

継留て家あそ西自れ鼻ひやげとて貞室
へ鳥者も厚きまきり。意地とらうと。重頼印と法入具

わつり越別ま頼貞徳と不和ありをねん厚も出れハ
貞室といとみおきり貞室母れ遊若の百白とて貞注
仕はりて密とて教く非言の書公極行きりま遊若
又板抄と重頼毛吹字と編集とて色と貞室あて
那山氷室守りや板抄とて色とあまきり或何重
頼貞室とあめの正色しひくろきり

釣かれれ日よけとてや鼻ひやげとて貞
室方へ鳥者もやまきり貞室あて

送り火やまきりとて大文字とて重頼
鳥者も厚きり。あびおまも一生仲あく能れ火
花とらじきり

鶴冠并良徳末末道高節る固宗解し。貞徳忠骨肉
の沖子少て多きるが。西武門身に等く。貞徳道高の
命毎々出産して跡目とお續してござり

誹謗を以て传的傳正統の事

貞徳家初此の世といふ言執波といふ言宗徳の大統
波より一書教んて山本西武よ命して撰之次此
書紙太子集といふ親重よ命して撰之是大統波
の子方へび集よ付て親重といふ親と集紙わんて
ひて遠論よ及ふ貞徳(新)とせれど。あ方此極子と
実あふ言親我傍の非をせれど。貞徳中子分と。

不通とてせざり。親重のおまも出入せられ。紙宗親
ゆくと稱うといふとわきへ。あ人た中子分る趣ら
りきり。信て。あ人おまも。威勢と律ひ。自之れ忠者と
りきり。とせぬ。太子集のあ人此編集と。二書小治山
集。貞徳よ命して編集と。三書同ハ崑山よ射して。
五編集といふ。安尔正章。貞徳死後よ。昌易子(忠)と
して。心系。忠判のあふ。もら加て。編集と。いふあ
集。此撰者てゆり。とれ。あ人たよ。忠者といふ。連
方統波。四書。宗徳の作。紙宗大統波。宗徳の作。入
連方よ。謙退して。たの字と。とら。き。き。り。言。執。波。
西武作。太子集。言。親。我。傍。山。集。良。徳。作。玉。海。集。心

ハ隸士と牡丹花ハ系圖小釣うりむらあゝあゝ
推量れぬせ幸々牡丹花宵柏ハ連方ハ家通和尙
の奥深と宛め古今と傳文一ニ條此正統と此
キハ連方新武の作者ハ隸諧傳と云々半がハ

賤物波止澤句利之事

真連方ハ賤文字ニ付テ梵漢和風之傳来天漢
宮之字即一ハ妙理又ハ義之卯加アリテ天下人
之家通ナラテハ權頂ニアツカラス依之隸諧之連歎
ニハ辞讓謙退トテ貞徳用捨アリテ唯隸諧之連方
ト可書ト定らん、是一ケノ口傳ニテ隸ハ賤物ヲ不

取也此隸説妙滿寺會々ハ先の時連方ハ後され
一ハ立甫モ親重と云ハ此中云とてさうれぬ
とあきて一流と云ハ時賤物と云ハ作りて別
人多ひ事少モ賤物ハ書出されハ重軽ハ家
まそ一流おそハ連方隸の言春宵子ハ成て賤
物と用てハ作りせられハ貞徳的流ハ賤何の
ハ作りハ隸諧之連歎と五文字ハ書ハ

隸諧之二字之事

貞徳的傳々ハ一流ハ隸之字也傳文隸説口傳アリ
是才一ハ熱怒されハハ隸ニ付隸諧之書物也

凡そハ詠ニハイノ声アリト云唐日中ノ文書と引て
 滑稽ノ二字アリ之類ノ書出テ善理と云テ詠
 ノ字ヲ難志ノ所書物多アリ詠獨ニ元祖ト云テ
 貞徳ト云上林道春令子昌三亦ハ詠中子子持アリ
 一明心居士詠ノ字ヲ用也亦云々乎古今傳文其貞
 徳ト云ヤウぬさうト云ト者違矣止于方ハ云ハ云
 折ノ真連方ハ小賊之字ト下加詠獨ニ連弁アリハ
 詠之字ト口波ト云古今傳文ト云々ト秘傳此
 昨読ト云リ詠ハぬまノ理ト但云ハ吟味仕スル
 詠ノ詠士多珠傷ノ事ト慈量ナルト云々ト
 け比固水ト云詠詠士亦傷ノ花見車ノ返答ト云ハ

詠之字ニ付テ詠ハ情ト云鋒ト揮テ骨折レ
 タリト云ヤウ貞徳流ハ詠ノ字ヲ用テ人々ハ詠
 ト掛ル事迷惑ナレタ定家亦貞徳ヨリ此詠
 傳リキト云詠ハ心ト云ヤウ詠ハ心ト云ハ
 其ハ心ト云リト云ハ合志此詠事傳ル下自己
 小智ト云捨テお海ノ事アリト古今ハ捨遣也ト云
 其ハ詠ノ字ハ用ラキキリ詠ハ極子ト云ハ其
 詠ハ心ト云ハ其法ト云大恥のりト云ハ其ハ
 名詠ト云ハ心ト云ハ其ハ合志此詠ト云ハ其ハ
 其ハ其ハ其ハ其ハ其ハ其ハ其ハ其ハ其ハ其ハ

賤物と云ふ人をもあらん俳諧と連方と云ふもあらん
俳之字と書ていれ必神祕の西理ありぬ事
そや唯何ぞこれおりにあらんか
かたにききしとありて俳諧を身体の物あきと
行ふとゆふをて誹之字と用らるるは神極し
しひほひとく知人れんてあつたもあつた
厚く向後誹之字よりあつた大事れ題目
たれハ今とて一と一世話よりあつたハといふの誹
の字もあつたぬありとて人毎小わあつた
ゆとあつたや家三ありてよく証按わり山平西武
万葉の俳諧の跋と杉永懷徳堂永三先生れは

正業ありそれハ三所あり誹之字よりあつたハ永三ハ
昌之ノ子あつた今存生くび人いそハイノ声ナキ
誹ノ字よりあつたとてあつたハ何時あつても
是とて一とそれとてあつたハ永三懷徳堂人といふ
是とてあつたハ永三懷徳堂人といふ
言と吐て難しとてあつたハ永三
紀之固水史記ツリて滑稽ハ乱同ニ字心也言非
ト云則誹之言是ト云則諧之是とて先誹諧之ニ
字ハアラハレタリ然大事れは俳ノ字人非
トカケル字訓乱同ノ滑稽ニ叶乎如何誹ハ南尾ノ切
ハイノ音ナレト云一理ニヨリテ和訓名義ノ風俗ヲ不知

三テ也くじつ初のとりる事、只神道の秘密ヲ
 ラント我とわきま、誹諧の点者げ事、此類りく
 きて、身徳は傳文に事わつたて、言はく、心
 く、誹の字くせんく、おられ、唯今身徳
 傳誹の点者系約はあく、たれ、誹諧は、
 俳諧とし、又誹諧とし書り、賤何何賤、
 去、神と、連方れまの、び、つ、ま、
 貞徳門流と名のりて、賤物を用ひ、傳誹は、
 の、志れも、俳の言とく、仲有、ま、
 者、多、放、それら、び、や、
 持と、出、初、と、ゆ、より、と、事、わ、
 是

とう、
 ら、
 思、
 是

